

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 4 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381245

研究課題名(和文) 英語の4技能における語彙レベルと会話能力との関係性の検証

研究課題名(英文) Verification of the relationship between vocabulary level and conversational ability in the four English skills

研究代表者

川崎 由花 (Kawasaki, Yuka)

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：90615832

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英語の4技能である「聞く」「話す」「読む」「書く」能力と語彙力との関連性を明らかにすることを目的とした。英語運用における基礎となる語彙を実験材料とし、大学生を対象に、語彙力と聞く、話す、読む、書くそれぞれの技能との相関を検証した。結果、いずれも有意な値は得られなかった。すなわち、語彙力が高い者が各技能も高いというような結果は本研究からは示されなかった。

研究成果の概要(英文)：In this study, we aimed to clarify the relationship between vocabulary level and the four English skills, "listening," "speaking," "reading," and "writing." We examined the correlation between the English vocabulary levels and the skills of 1) listening, 2) speaking, 3) reading, and 4) writing of college students, using vocabulary that is the foundation of English proficiency as the experimental material. As a result, there were no significant differences in any case. In other words, the results showed that those with high vocabulary skills were not necessarily high in each of the four English skills.

研究分野：教育方法

キーワード：英語力 語彙サイズ 記憶

1. 研究開始当初の背景

近年、使える英語の習得が求められているが、会話能力が向上しない学習者が多い。英会話能力の育成には、「伝えたい」意欲を高める指導が重要であり(金子, 2012), 言語に関して肯定的な価値観と態度を養成することで動機づける必要がある (Zoltan, D., 2005) と報告されている。また、日本では早期英語教育が進められているが、Broun (2007) は、話せるようになるためには十分なインプットが必要であるため、英語学習初期段階でのスピーキング重視に疑問を呈している。

これらの先行研究が示すように、発話を促す要因として情意面、および、学習プロセスを扱った研究は国内外において多数あるが、英語の4技能「読む」「書く」「聞く」「話す」それぞれの技能における語彙レベルと会話能力との相関関係については申請者らの知る限り明らかにされていない。そこで、これらの関係性から、会話能力を促進する要因を特定することができれば、会話能力の向上、つまり、使える英語習得へつながると考えられるため、本研究を行うこととした。

本研究の実験材料に語彙を用いる理由は、近年報告されている「短時間の語彙学習の成果が長期に保持される」という知見によるものである(Kawasaki & Terasawa, 2009)。この研究結果が示す通り、語彙能力は学習時間とともに向上していることが明らかになってきている。しかし、英語運用能力に関しては、2003年文部科学省発表の『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』に掲げられた目標に到達していないという報告もあり(松宮, 2012), 語彙能力と会話能力の習得には隔りがあることがうかがえる。したがって、筆者らのこれまでの研究成果を踏まえて研究を行い、『英語が使える日本人』の育成に貢献できる新たな知見を得ることは、社会的に大きな意味を持つと考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

(1) 当初の目的

本研究では、英語の4技能である「読む」「書く」「聞く」「話す」における語彙レベルを測定し、技能間の相関関係を検証した上で、会話能力との関連性を明らかにすることを目的とした。英語運用における基礎となる語彙を実験材料とし、高校生を対象に、(1) 読む、(2) 会話文を読んで書いて答える、(3) 聞く、(4) 会話を聞いて口頭で答える、の4形式を用いて、それぞれの活動の中での語彙の認識・再生実験を行う。発音に均一性を持たせるため、テキストファイル音読ソフトを用いて(3)(4)の実験材料を作成し、コンピュータを用いて実験を行う予定であった。

(2) 研究計画の見直し

研究代表者の異動等の事情により、当初の研究計画の遂行が難しくなったため、研究計画を見直すこととなった。申請書の「研究が計画通りに進まない時の対応」に従って再検討をした。

まず、実験参加者数の見直しを検討した。結果、人数の見直しのみではなく、実験対象者を高校生から大学生に変更することとなった。

次に、調査内容の検討を行い、実験対象者が大学生に変更となったことを受け、大学生の英語力と語彙サイズについて調査することとした。実験に参加した大学生は小学校教員を目指しており、小学校での英語教育に関する質問紙調査から英語力に関するものを抽出し、4技能に分類して語彙サイズとの相関を検討することとした。

また、音声教材を用いての会話実験のための予備実験として、スマートフォンが活用可能かどうかの検証をすることとした。

3. 研究の方法

(1) 質問紙調査、語彙サイズ調査

① 参加者

岡山県内の4年制大学に在籍している大学生37名が本研究の調査に参加した。

② 材料

質問紙調査に用いた質問項目は、「言語教育履修生のためのポートフォリオ」(JACET教育問題研究会, 2012)に収録されている100項目を用いた。その中から英語力が必要と思われる質問に関する20項目(聞く:3項目、話す:9項目、書く:4項目、読む:4項目)を使用した。回答は各質問に対して、「0:全く当てはまらない」から「6:非常に当てはまる」の7件法を採用した。

語彙サイズテストは、望月(1998)による「語彙サイズ測定テスト」の7000語レベルのすべての設問(210問)を使用した。

③ 方法・期間

質問紙調査は2017年5月、語彙サイズテストは2017年6月に、大学の講義中に一斉に実施した。結果、回答に不備のない37名(男性19名、女性18名)が分析の対象となった。

(2) 会話実験のためのスマートフォン使用

① 参加者

兵庫県の市立小学校の第5学年の男女計68名が予備実験に参加した。

② 材料

今回は、スマートフォンの使用が可能かどうかの予備調査であったため、本研究代表者・分担者らが他の研究で使用している漢字ドリルの教材を用いた。

③ 期間

平成29年2月および3月に実施した。当初は教師の指導の下授業中に実施し、のちに、

休み時間、放課後等好きな時間に児童主体で学習可能とした。

④ 方法

児童がそれぞれスマートフォン上でドリル学習をし、データを送信、メインサーバで受信し、同時に集計をする形をとった。学習とテストを一体化させた学習効果測定法『マイクロステップ計測法』を用いて、縦断的教育ビッグデータを収集・分析し、従来の研究では測定することのできなかつた成績の変化を可視化した。学習は、記憶研究の知見に基づいてスケジューリングをした漢字教材を搭載したスマートフォンを用いて、児童各自のペースで行われた。学習終了と同時に児童がデータを送信し、縦断的教育ビッグデータとして集約、分析を行った。

4. 研究成果

語彙サイズについて、望月(1998)の採点方法に従って集計したところ、推定平均語彙サイズは3845.71語(標準偏差552.95語)であった。次に、質問紙調査の質問項目から「聞く」「話す」「読む」「書く」技能に関する項目をそれぞれ順に3項目・9項目・4項目・4項目抽出し、語彙サイズとの相関を検討したが、いずれも有意な値は得られなかった。すなわち、語彙力が高い者が各技能も高いというような結果は本研究からは示されなかった。

スマートフォン利用は概ね順調に進められた。今回は音声を載せることはできなかったが、今後、音声を用いた教材で実装実験をし、データの収集が可能かどうか、さらなる調査を続ける必要がある。

<引用文献>

- ① Brown, H. D. (2007). Principles of Language Learning and Teaching. New York, Pearson Education Inc.
- ② 金子朝子(2012). 「伝えたい」意欲を高める指導 英語教育 大修館書店, 6, p.21.
- ③ Kawasaki, Y. and Terasawa, T. (2009). Educational Effects of Computer-based Language Learning Materials: Evaluation of Memory Retention in Long-term Intervals. Proceedings in Association for the Advancement of Computing in Education, pp.2742-2750.
- ④ 松宮新吾(2012). 早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす影響についての調査研究: 小学校外国語活動及び中学校1年生の英語学習に関わる実態調査分析 関西外国語大学研究論, 95, p.207 2012.
- ⑤ 望月 正道(1998). 日本人英語学習者のための語彙サイズテスト 財団法人語学教育研究所紀要, 12, pp.27-53.
- ⑥ Zoltan, D. (2005). 動機づけを高める英語指導ストラテジー35(米山, 他訳) 大修

館書店, p.60.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

寺澤孝文 (2015). 教育ビッグデータの大きな可能性とアカデミズムに求められるものー情報工学と社会科学のさらなる連携の重要性ー コンピュータ&エデュケーション (コンピュータ利用教育学会), 38, pp.28-38. (依頼論文: 査読有).

[学会発表] (計 2 件)

① Terasawa T., Kawasaki, Y. (2014).

Assessment of Improvement in Vocabulary Learning with Longitudinal Big Data: Application of the Scheduling Principle Controlling Temporal Dimension Factors to Education. World Conference on Educational Media and Technology (Ed-Media 2014), pp.2131-2139. (full paper proceedingとして査読有).

② Kawasaki, Y. (2015). What Can Big Data Tell You? International Conference on e-Commerce, e-Administration, e-Society, e-Education, and e-Technology, Kyoto, Japan (Keynote Speech, 招待講演).

[図書] (計 1 件)

① 寺澤孝文(2016). 潜在記憶と学習の実践的研究 太田信夫・佐久間康之(編) 「英語教育学と認知心理学のクロスポイントー小学校から大学までの英語学習を考えるー」北大路書房, pp.37-55.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

川崎 由花 (KAWASAKI YUKA)
兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・
准教授
研究者番号：90615832

(2)研究分担者

寺澤 孝文 (TERASAWA TAKAFUMI)
岡山大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：90272145

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()